

環境ホルモン報道と社会の混乱

(2006年11月14日・化学物質リスク国際シンポ)

環境ホルモン検出を伝える「黒本」の記事

(↑1998年1月6日朝刊)

性ホルモンかく乱^疑感物質

環境庁調査で検出

辺野港
周市川
都河川
大

野生動物やヒトの性ホルモンをかく乱して、生殖異常をもたらすとされる「内分泌かく乱物質(環境ホルモン)」の一種「ビスフェノールA」が、大都市周辺の河川や港湾の底質調査で、過半数の調査地点から検出されたことが六日、環境庁のまとめで初めて明らかになった。同じく近く発表する有毒化学物質に

関する年次報告「化学物質と環境」で、詳細を公表する。

「ビスフェノールA」は合成樹脂(ポリカーボネート)の原材料で、女性ホルモン(エストロゲン)に近い化学構造を持つ。生体内に入ると女性ホルモンと同じ働きをし、生殖機能を乱させると指摘されている。

が検出された。

また、水質調査でも、五十地点中36%に当たる十八地点で検出(0.01-0.268ppb)されたほか、五十一地点中三地点の魚類からも0.015-0.287ppbの範囲で検出された。検出された地点については公表できないとしている。

ビスフェノールAは環境庁の研究班が内分泌かく乱物質としてリストアップした六十七物質の一つだが、環境基準はない。同じくは七六年度にも調査したが、

この際には検出されなかった。同じ環境保健部は、「ビスフェノールAは内分泌かく乱物質の疑いがあり、今後環境の調査と監視は必要」と指摘している。

井口泰泉・横浜市大理学部教授(内分泌学)の話「環境中に散布する農薬と違って、合成樹脂原材料であるビスフェノールAは本来、環境中に存在しないはず。河川や港湾から検出されること自体が問題だ。検出濃度で生物に影響が出るかどうかは不明だが、きちんとした追跡が必要だ」

環境庁の全国調査では、

大都市を中心に一九七四年から毎年、環境中の化学物質の残留状況を調べている。今回は全国計五十六地点で、川底や海底の泥、魚類、水質を調べた。

その結果、底質の調査地点となった計五十五地点中、60%に当たる三十三地点で、0.00059ppb-0.6ppbのビスフェノールA

変容する「環境ホルモン」の評価

- 1) 「性ホルモンをかく乱して、生殖異常をもたらすとされる物質」(読売新聞初報記事の表現)
- 2) 「ホルモン異常をもたらす物質」
- 3) 「危険物質」、「毒性物質」
- 4) 少年たちが「キレル」原因物質(立花隆)
- 5) 「猛毒」、「狂気の化学物質」

環境ホルモンをめぐる雑誌報道の推移 (98年)

- 「ダイオキシン牛乳でわかった環境ホルモン汚染の**恐怖**」(フライデー4月24日号)
- 「虫歯の詰め物に“**猛毒**”環境ホルモンが使われている」(週刊現代4月25日号)
- 「環境ホルモンか？ 生まれた子供の9割が女児の村があった」(週刊現代5月2日号)
- 「忍び寄る環境ホルモンの**恐怖** 精子激減」(週刊読売5月3日号)
- 「見えない**猛毒** 環境ホルモン汚染の**恐怖**」(女性自身5月5日号)
- 「環境ホルモンという名の**悪魔** 人類を滅亡させる**狂気**の化学物質」(廣済堂出版刊)
- 「いわく**史上最悪の猛毒**、**人類絶滅の危機**」(週刊文春5月28日号)
- 「環境ホルモンは人類の『**がん**』だ ダイオキシン汚染」(週刊ポスト6月12日号)

少年たちが切れる現象の原因？

「環境ホルモンは人類を滅ぼす」(中央公論98年4月号)

評論家の立花隆さんと日本テレビプロデューサーの笹尾敬子さんが対談

化学物質の中には動物実験で神経系の発育が遅れたり、行動機能の障害が観察されたという報告を受けて、立花さんは、現代の少年に多発する「キレ」る現象、その結果発生する事件の原因が、環境ホルモンであると指摘した。

「環境ホルモンが神経系に影響を与えた結果として起こる、性行動以外のいろいろな行動異常 人間にもそれがめだちます」

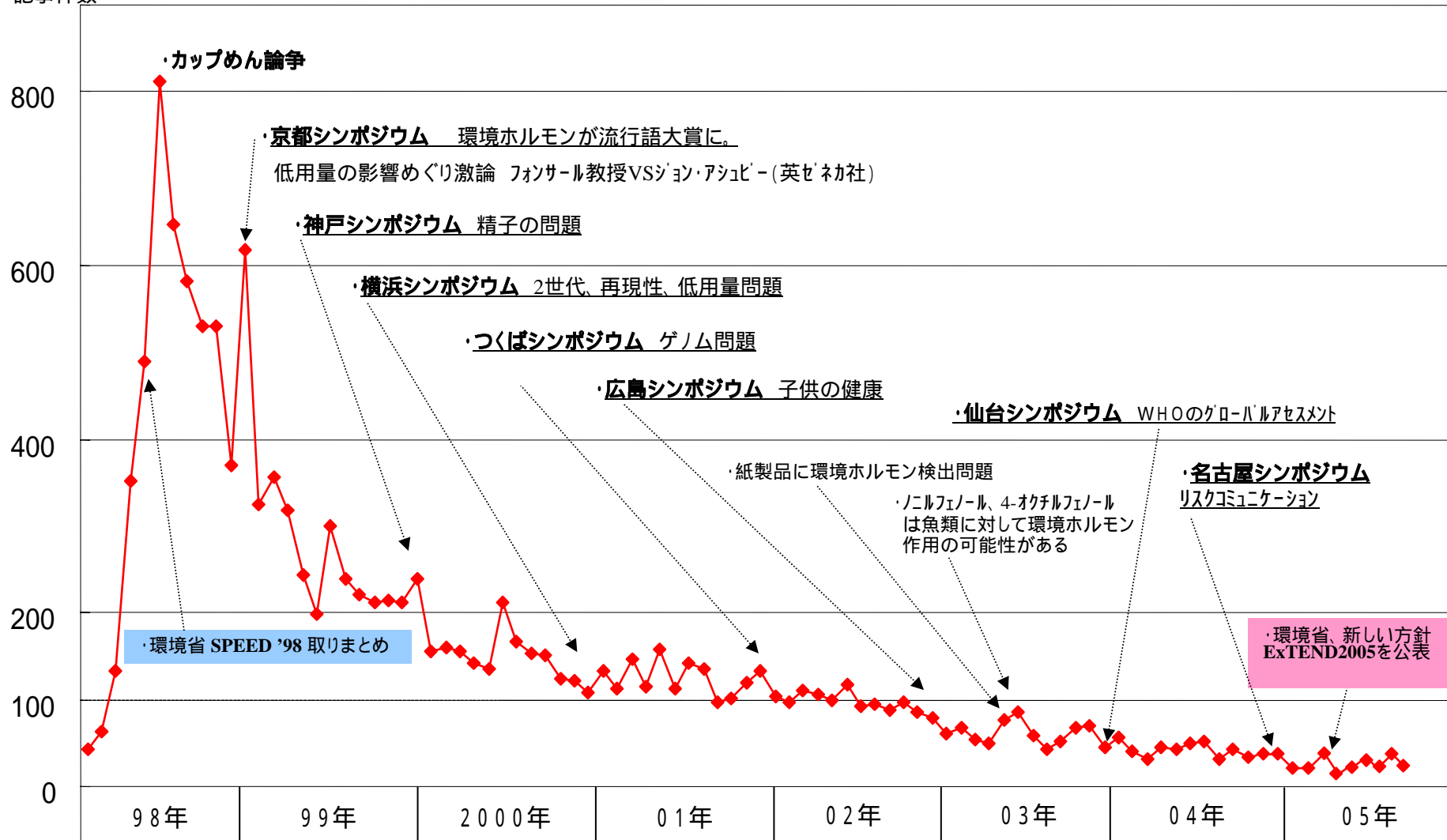
「いまアメリカでも日本でもLDという学習障害児がすごく増えているのはこれじゃないかと思うんです」

「そうなんです。実は私も、あるいはそうじゃないかと思っていた」

内分泌攪乱化学物質(環境ホルモン)問題

国際シンポジウムのトピックスと新聞報道記事数推移(2005年9月末現在)

記事数



Shigeyuki Koide
 主要日刊紙(地方紙含む)、週刊誌等 51紙・誌を対象 調査:(社)日本化学工業協会

ダイオキシン、環境ホルモン騒動

(マスメディアが関与した混乱例)

- 1) 98年1月、「化学物質と環境」調査結果報道で始まった
- 2) 前段に「奪われし未来」の出版(97年9月)
WWFの可能性リスト、野生生物で初めてのデータ報告
- 3) 生活面、教育テレビの世界から、ニュースへ(1月)
(黒本の存在と、環境省クラブの継承事項)
- 4) 社説、コラムにまで発展(2月)
(「ヒトは子孫を残せるか」「内分泌かく乱物質の不安」)
- 5) 実像を超える報道の増加(4月)カップ麺騒動
- 6) 評論家の「切れる子供たち」発言、TV番組の影響
「恐れのある物質」、「猛毒」、「子供たちがキレル原因」
= 社会的事実と科学的事実の乖離
- 7) 環境ホルモン騒動本格化(焚き火、母乳是非論争の混乱)
- 8) 冷静な議論を求める批判意見
- 9) 収束と忘却、次の標的は？

20世紀末という時代性

- 世紀末現象 (1998 - 1999年の出版界)
破滅予告「ノストラダムスの予言」
世紀末へ向けての恐怖本
- コンピューター2000年問題
技術が起こすカタストロフの予感
- 97年12月に京都会議
(気候変動枠組み条約締約国会議)
地球環境への関心が高まる

ダイオキシン問題の反省と評価

<メディアの反省>

- 「報道の娯楽化」をどこまで許すか(民放TV、週刊誌)
- すべてのメディアが、科学情報の扱い方を洗練させる必要

<前進>

- 廃棄物処理の方法が改善(焼却条件など)
- 環境化学物質への関心、研究、予算が増大
- メーカーに情報開示、説明の姿勢(科学者、技術者)
- リスク評価の普及、市民理解・参加への一歩

<混乱、疑問>

- メディアの特色と役割を、市民は理解したか？
- 母乳をめぐり不安が増大
- 「焚き火」「野焼き」は本当に止めるべきなのか？
- 「研究・調査」に膨大な費用と時間

科学者とメディアの違い

< 科学的事実をニュースにするにあたって、相反した視点を持っている >

科学者;

得られたデータに、それ以上のものを語らせない

プレス;

得られたデータから、目いっぱい材料を引き出そうとする

ニュースの特性

- 1) 新聞報道の原点は、ニュース取材
- 2) 目立つ、新しい、珍しい、驚く ことに惹かれる
- 3) 社会の向かう方向、新たな傾向、潮流には敏感に反応
- 4) 理屈や論理より、情緒や感動を選ぶ
- 5) 正確さよりも、速報性を尊重しがちな傾向

科学記事、技術記事がおかしな取り上げられ方をする背景

不信が生まれる背景

- 「水俣病」50年。科学者は総括できたか
- 「もんじゅ事故」への技術者の対応
(うそをつく、ばれると隠す、あいまいにする)
- 環境ホルモン騒動時の日本学会議の対応(専門領域を超える総合的な対応ができない)
- 遺伝子組み換え技術、BSE対応時の説明に不足はないか
社会、行政の混乱を助長してしまう

水俣病公害を振り返る

- 2006年5月1日 水俣半世紀
- 1959年、熊本大研究班；原因物質は有機水銀と公表
- 同年、厚生省食品衛生調査会も、原因は有機水銀化合物と答申
- チッソ(新日本窒素肥料)と日本化学工業協会は、強硬に反論
- 1960年、政府の調査研究連絡協議会、日本医師会調査班
結論なく消滅
- チッソ；責任は認めないが、見舞金支払い、将来の権利放棄要求
- 水俣病拡大、1960年以降の無策は、政府責任(最高裁判決)
- 1963年、熊本大が、メチル水銀と原因を特定
- 1968年、政府はようやく工場廃水が原因と認める

不信の背景は？（この間の、チツソの対応）

- 合成プロセスに関する情報の開示拒否
- 廃液サンプルの採取も拒否
- 有機水銀原因説をチツソは否定
- ところが、チツソは1959年、ネコの実験で原因をメチル水銀と特定
- このデータは開示せず、工場の原因説否定を続行
- 無機水銀は有機水銀とはならない、と虚偽を主張

化学工業の社会に対する姿勢は？
技術者、科学者への信頼とは？

誰も説明しなかった原因

検証責任 社会的信頼の原点

- 技術は常に危険を内在する 絶えず専門的な検証、危険回避努力が不可欠
- ところが、発症プロセスを科学的にきちんと検証するはずの国、自治体、企業、大学は？
いずれの研究機関も「タブー」視してきた

化学工業界、行政はどう総括するのか？

結局、「水俣病の科学」(2001年)まで・・・